

## 銀座文壇クラブのママとオンラインで繋がったら酒場愛が止まらなくな った！

銀座にある文壇クラブ・ザボン。40年以上の歴史を持ち、丸谷才一氏、渡辺淳一氏など、そうそうたる作家が愛したことでも知られている。そんな名店を支える水口素子ママと、月吠え通信編集長コエヌマのオンライン飲みを、記者みどりが密着レポート！

銀座×新宿ゴールデン街、老舗文壇クラブ×プチ文壇バー。異色の組み合わせからどんな会話が生まれたのだろうか。出版文化、酒場経営、コロナなど話題は多岐にわたった。

本企画は、プレジデント社主宰で、ザボンさんが実施したクラウドファンディング『銀座の老舗文壇バーを支援！ママと「オンライン飲み」してみませんか？』のリターンとして実現したものです。

<https://presidentinc.en-jine.com/projects/president-ginza>

### 銀座は未知の世界！？

素子ママ：はじめまして。

コエヌマ：はじめまして、今日はよろしくお願ひします。よければ最初に乾杯をさせてください。

素子ママ：そうですね、乾杯！

コエヌマ：乾杯！……それにしても、すごく斬新な試みですよ。いろいろな飲食店がクラウドファンディングをしています、リターンはドリンクチケットが多くて、“ママとオンライン飲み”はほかになかった気がします。

素子ママ：私はプレジデントオンラインさんで連載をさせてもらっているのですが、そのご縁で、プレジデント社の方に企画していただいたんです。オンライン飲みなら、

銀座になかなかいらっしゃる機会がない方とお酒を飲めて、面白いんじゃないかって。

コエヌマ：確かに。僕は新宿でお酒を飲むことが多いのですが、夜の銀座は未知の世界という印象です。どう振る舞えばいいかとか、想像できないんですよね。

素子ママ：文壇界隈でしたら、新宿も銀座も同じお客様が多いから、雰囲気は近いと思いますよ。ちょっと値段が違うのと、銀座のクラブは女性（ホステス）がいるので、ときどき艶っぽい話にもなりますけど、文化圏は同じだと思います。

作家の M.S さんが、新宿と銀座の違いをエッセーに書いてらしたんですが、新宿で飲むとママにお説教されるんですって。銀座のザボンで飲むときは、ママはじめ大した美人がいらないから気楽に飲める、って仰ってました(笑)。

コエヌマ：そうなんですか(笑)。

素子ママ：褒めてるんだか、けなしてるんだかよくわからないんですが(笑)、まあリラックスできると書いてありました。K.S 先生もそうです。ザボンに来ると、ホームグラウンドに帰ってきたみたいにリラックスできるんですって。だから遅くまでいて、それから新宿に行って朝まで飲まれるんですよ。

コエヌマ：そう聞くと、銀座も身近に感じますね。

素子ママ：うちは気取ってないですから、親しみやすいと思いますよ。私がノ一天気なので(笑)。

## こんな人はひっぱたきます

コエヌマ：お客様で文壇の方が多いと、働いている女性たちも本がお好きなのですか。

素子ママ：うちは小説家も漫画家の先生もいらっしゃいますが、来てくださる方の本を、女の子たちは大体目を通して見ます。先生のお名前や、どういうジャンルで書かれているか、どういう作品があるか、など把握していると思いますよ。

コエヌマ：は～、さすが。採用基準が気になります。

素子ママ：本とか映画とかお芝居とか、文化的なものが好きな子は採用します。そう

いうのは興味ありません、って人は合わないかな。

コエヌマ：やはり美人なだけでは務まらない。

素子ママ：はい、お客様が退屈されてしまいますからね。映画や音楽の話ができれば、会話が広がっていくことが多いんです。私もね、毎日ひとつずつ新しいことを覚えるようにしています。毎日テレビのニュースを見ているし、映画専門チャンネルもいっぱい契約しているので、昔の洋画をよく観ています。コロナになる前は、月1回は必ず映画館に行っていたんです。

コエヌマ：銀座のママは、お客様との会話を弾ませるために、勉強をおこたらないと聞いたことがあります、やはり努力されているんですね。

素子ママ：でも私、時代遅れなんです。昨日もね、パプリカって言われたのを、食べるパプリカだとばかり思っていて。そうしたら、米津玄師さんの「パプリカ」っていう歌だったんですね(笑)。

コエヌマ：若者文化にまで詳しくたらすごいですよね(笑)。ところで、お客様が口説いてきたときに、働いている女性はどのような距離感で接するんですか？

素子ママ：そこはね、各自にお任せしていますが、やっぱり口説く以上は覚悟してもらわないと困りますよね。初めて来たのに、「ホテル行かないか？」なんて言う人は、私がひっばたくんです。「何言ってるの、来たばかりでしょ。そういうことは、もう少し月謝を積んでから言っていただいた方がよろしいですよ」って(笑)。

コエヌマ：さすが、毅然とされていますね...！

素子ママ：でも最近は、ギャラ飲み目当てみたいな女の子も時々舞い込んでくるんですよ。働きたいって面接に来て、終わってもなかなか帰らなくてお客様と飲みながら1~2時までいて。タクシー代だけもらって帰って、結局それっきりの子がいました。だんだんプロがいなくなっちゃったんです、銀座は。私たちのときは修行して、自分でお店を持ったママが多かったんですが、今は素人さんの方が強いですよ。

コエヌマ：確かにお店を構えるとあまり身動きできないけど、働くだけなら、すぐいなくなったり逃げたりもできますものね。

素子ママ：信用第一で私たちはやっていますから、ちょっとでも変なことしたら「あの店はこうだ」って噂になりますもの。だからお客様といい加減なことはできないです。

し、常におもてなしの気持ちを持ってやっています。

## 銀座のママから見たゴールデン街

素子ママ：コエヌマさんのお店は、どういう方がいらしてるんですか？

コエヌマ：うちは若い人が多いです。編集者も来てくださいますし、ライターや作家の方も。これから出版社に行きたい大学生もいますね。そういう人同士が交流できる場になれば、と思ってお店をつくったんです。ママは、ゴールデン街には行かれたことありますか？

素子ママ：いえ、全然行かないです。と言うか、連れてってくれる人がいないんですよ。お店が終わると、お客様は若い子を連れて新宿に行くのですが、「ママはお留守番」って誰も誘ってくれないの(笑)。

コエヌマ：(笑)。どんなイメージがゴールデン街にありますか？

素子ママ：今は外国人のお客様が多くて、国際的じゃないんですか。

コエヌマ：そうですね。今はコロナで外国人がほぼ全くいないんですが、ちょっと前まで観光地としてすごくにぎわっていました。

素子ママ：こういうことを言うと失礼ですが、ゴールデン街っていうと、昔は青線地帯っていうイメージが強かったんですよ。そのころには何回か行きました。小さいお店の1階で飲んで、2階はよいところなんだよ、という話を聞いたのを覚えています。

コエヌマ：実際そうでしたものね。それから、文化人が集まる飲み屋街になったと聞いています。僕もすごく本が好きで、一時は小説家になりたかったんです。なのでゴールデン街は、中上健次さんや田中小実昌さんとか、そうそうたる作家たちが飲んでらっしゃった街ということで、すごく憧れがありました。

素子ママ：うちに来るお客様も、新宿で飲まれる方が多くて、ゴールデン街のお噂も聞いています。私も今度、行ってみようと思います。

コエヌマ：ぜひ、ご案内します！

## 美人ホステスとママが語る文芸評論家との思い出

素子ママ：あ、よければ女の子を一人呼びますね。エミュちゃん、ちょっと！

エミュ：はじめまして、エミュです。よろしくお願いします。

コエヌマ：よろしくお願いします。エミュさんはザボンさんではどうして働きはじめたんですか？

エミュ：お友達の紹介だったんですけど、文化人の方が多く来られるって聞いて、すごく勉強にもなるだろうなと。もともと本は読まないタイプだったんですけど、ここで働くようになってから、ものすごい量を読むようになりましたね。

素子ママ：エミュちゃんは、亡くなられた文芸評論家の坪内雄三さんの担当だったんですよ。

コエヌマ：そうなんですか！？ どのくらい担当されていたんですか？

エミュ：ここ2、3年ですかね。1～2週間おきに同伴してくださって、いろいろなところに連れて行ったもらいました。奥様も交えて飲みに行ったり、相撲にも連れて行ってもらったりしました。

素子ママ：私は坪内さんが20代のころから知っていたんです。雑誌の編集をなさっていたときに、丸谷先生たちといらしていた時代があって、そのころからのお付き合いですね。

コエヌマ：坪内さんと言えば、「酒中日記」も見ましたが、豪快というか、古き良き昔の文壇というイメージの方です。

素子ママ：最後の文士だと思うんです、昭和の慰労を残した文士って感じですよ。

コエヌマ：僕の知り合いも酒場でからまれたと言っていました(笑)。

素子ママ：昭和はそういう作家さんが多かったですが、坪内さんが最後じゃないですかね。色んなエピソードいっぱいありましたけど、今は楽しい思い出です。私もしょっちゅう喧嘩しましたよ。

コエヌマ：それはどんなことで？

素子ママ：ママはボケてきたから、晩節を汚さないためにももう店を辞めた方がいいよ、って仰ったので、ムカッと来て、「そっちだってボケてんじゃないの」って言って喧嘩したんですよ。いつもそんな感じで、喧嘩したり仲良くなったり……なんかもう兄弟みたいでした。

コエヌマ：すごく貴重な思い出ですね！

## 大作家たちが原稿料ナシで寄稿

コエヌマ：もう少し文壇の先生方とのエピソードをお聞きしたいです。

素子ママ：丸谷オ一先生がうちの名付け親で、一番お世話になった方なんです。だから、丸谷先生が芥川賞の選考委員をしてらっしゃったとき、選考会の帰りにはいつもここでお祝いをしてくださっていました。受賞者の方も来てくださってね。ザボンをオープンしたとき、お客様に「ザボンは文壇バーです」って言ったら、丸谷先生に叱られたこともありました。

コエヌマ：何ですか？

素子ママ：自分で文壇バーと言うやつがあるか、って。「どういうときに言うの？」って聞いたら、「それは世間様が言うてくださるんだ、みっともないこと言うんじゃない」と。はあ、そうなんですか……って恐縮したことがありましたね(笑)。

コエヌマ：いやその通りですね(笑)。うちも文壇バーとか勝手に名乗っちゃってるんです。開店当初は、ゴールデン街で古くから飲まれている方々に怒られたものでした。

素子ママ：いいじゃないですか、なんでもいいんですよ。でもね、昔の作家さんたちは、そういうことをきちっと教えてくださいました。実はそういった体験を書いたエッセーが、11月に新潮社から出版されるんですよ。

コエヌマ：そうなんですね、すごい！

素子ママ：寄稿してくださった先生方がすごいの！この間亡くなられた坪内祐三さんはじめ、重松清さん、島田雅彦さん吉田修一さん、さいとう・たかをさん、北見けんいちさん。私の書いたものより、そっちの方がはるかに面白いです(笑)

しかも、皆さんタダで書いてくださって。原稿料払いますって言ったら、「飲み代と相殺でいいよ」って。

コエヌマ：それ世の編集者が聞いたら卒倒しますよ。うらやましくて(笑)

素子ママ：今じゃ考えられない思い出がもう、いっぱいあるんですよ。だから老後のわたしは思い出だけで生きてます。

コエヌマ：いやいや、これからも文化を担って、思い出をたくさんつくってください！

### ホオズキに込めた思い

コエヌマ：ところで、コロナの影響はどうですか？

素子ママ：ものすごくありますよ。文学賞の選考会も、今年はコロナの影響で、お昼の2時から4時までなんですって。食事なしで早く終わっちゃうので、そのあと銀座に流れることもないです。受賞パーティーも各社全部なしですよ。だからもう寂しいですよ、私たちは…

コエヌマ：そうですね…。やっぱりこんな事態は、40年やられて初めてですか？

素子ママ：はじめてです。これまでもバブル崩壊とかリーマンショックとか、いろいろなことがありました。3.11のときも皆さんが自粛されて、すごく不景気になったんです。そのときに、渡辺淳一さんなどお客様の作家の方のお名前を借りて、「こんなときだからこそ銀座の火を消さないで出てきてください」と案内状を書いたんですよ。そうしたらたくさんの方が来てくださって、なんとか持ちこたえました。けれど、ここまで長くて深刻なのは今回がはじめてです。

コエヌマ：僕もお店は大変ですが、感染リスクもあるし、「来てください」と言えないのが辛いですよ。もちろん、来ていただきたいですけど。

素子ママ：俺たちを殺す気か、なんて言われちゃいますものね。(笑)。辛いところなんですけど、でもね、めげないようにって、今はホオズキ祭りをやってるんですよ。これ、伝統行事で私毎年やってるんです。

コエヌマ：あ、きれいきれい、すごくきれいですね。

素子ママ：夏はホオズキ祭り、9月にお月見パーティー、そして12月にクリスマス、3月に桜祭りを伝統行事で毎年やっているんです。桜祭りは特に絢爛豪華なんですよ。桜の花をお店の中に300本くらい飾って、すっごいきれいなんです。いっぺん見に来てください。

コエヌマ：はい、ぜひ。大変ですが改めて、飲み屋という場所の楽しさや大切さを実感しました。特にこういった文化を担ってきたお店には、何とか残って欲しいってすごく思います。

素子ママ：私もいつもそう思ってるんですよ。お酒の取り持つ縁というか、お茶だけだとかこういう打ち解けた話はできないですね。うちは、作家さんに気軽にきていただけるよう、作家学割というのがあるんです。

コエヌマ：作家学割？

素子ママ：出版社とか交際費のあるところがお代を持つときは、オフィシャルの料金をいただきますけど、作家の先生が負担されるときは学割にしています。これは、眉とかエスポワールのころからそうでした。私もその伝統を引き継いでやらせてもらってます。

コエヌマ：とても粋なシステムですね。あ、そろそろお開きのお時間です。今日はありがとうございました、一度ぜひお伺いさせていただきます。

素子ママ：ぜひまたお会いしたいですね。私もゴールデン街に伺います。

コエヌマ：ありがとうございました。楽しかったです。

一見してかけ離れたふたつの世界を文士たちが求め、愛し、繋いだように、「お酒の取り持つ縁」が新宿の小さな文壇バーの亭主と歴史ある銀座の文壇クラブのママを繋いだ。「残っていきたい。」と語った二人の目は柔らかく、でも強く、同じ方向を向いていた。

ああ、酒場に行きたい！書きながら何度もたまらなくそう思った。